

福岡市東区

Na Ta
奈多砂丘B遺跡1

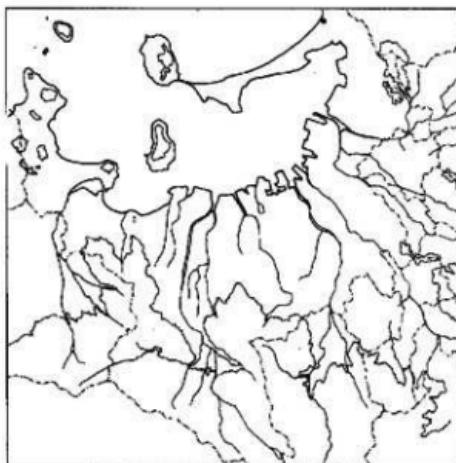
福岡市埋蔵文化財報告書 第360集

1994

福岡市教育委員会

Na Ta
奈多砂丘 B 遺跡 1

福岡市埋蔵文化財報告書 第360集



調査番号 9239
遺跡略号 NTB-1

1994

福岡市教育委員会

序

本市東区三苦から志賀島にいたる海の中道は白砂青松の海岸が遠なり豊かな自然を残しています。また、この自然を活かした海の中道海浜公園、雁の巣レクレーションセンター等の各種施設は、市民の憩いの場として親しまれているところです。

豊かな自然を誇る海の中道はまた豊かな歴史の残る所でもあります。大宰府との関連が注目される海の中道遺跡など多くの文化遺産が発見されています。今回その遺跡の一つである奈多砂丘B遺跡が、風波の侵食によって破壊され、消滅の危機にあることがわかりました。本市では、文化庁、建設省のご協力により、1992年度より保存のための調査を行っていくこととなりました。

本書はその第1次調査の報告書です。本書が文化財に対する認識と理解、更には学術研究に役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査に当たってご協力を賜りました各機関の皆様に、心より感謝申し上げる次第であります。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が、1992年10月14日から11月28日にかけて行った奈多砂丘B遺跡の第1次調査の調査報告書である。
2. 検出遺構については、調査時には遺構を示す記号Mを付し検出順にM 1から通し番号を付した。本書では、この番号からMを除き、遺構の性格を示す用語を付して、住居跡1、土壤2のように記述する。なお本書で使用する方位は磁北である。
3. 本書で使用した遺構実測図は宮井善朗が、遺物実測図は宮井のほか境靖紀、是田敦が行った。また整図は宮井のほか田村佐和子の協力を得た。また写真撮影は宮井が行った。
4. 本調査に関する記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理される。
5. 本書の執筆、編集は宮井が行った。

本文目次

I	はじめに	
(1)	調査にいたる経緯	1
(2)	調査の体制	1
II	周辺の歴史的環境	2
III	調査の記録	
(1)	概要	6
(2)	歴序	6
(3)	検出遺構	10
(4)	出土遺物	15

挿図目次

Fig.	1	奈多砂丘B遺跡群調査地点位置図 (S = 1 : 25000)	3
Fig.	2	調査区位置図 (S = 1 : 2000)	4
Fig.	3	調査区配置図 (S = 1 : 200)	7
Fig.	4	1区実測図 (S = 1 : 100)	8
Fig.	5	2区実測図 (S = 1 : 100)	11
Fig.	6	2区土鍤集中遺構実測図 (S = 1 : 20)	13
Fig.	7	3区実測図 (S = 1 : 100)	14
Fig.	8	土鍤実測図 (S = 1 : 3)	16
Fig.	9	住居跡3出土遺物実測図 (S = 1 : 3)	17
Fig.	10	住居跡3、住居跡9、土塙6出土遺物実測図 (S = 1 : 3)	18
Fig.	11	3区4b層出土遺物実測図 (S = 1 : 3)	19

図 版 目 次

P L. 1	(1) 調査前の状況.....	23
	(2) 1区南壁土層(北から)	23
P L. 2	(1) 1区南壁土層(北から)	24
	(2) 2区土層(西から)	24
P L. 3	(1) 2区3層上面遺構検出状況(東から)	25
	(2) 2区3層上面遺構発掘状況(東から)	25
P L. 4	(1) 2区遺構2土錐出土状況(北から)	26
	(2) 2区遺構2土錐出土状況(北から)	26
P L. 5	(1) 2区4a層上面遺構(東から)	27
	(2) 2区住居跡3(南から)	27
P L. 6	(1) 2区住居跡3遺物出土状況(南から)	28
	(2) 2区住居跡3発掘状況(南から)	28
P L. 7	(1) 2区4b層上面遺構(東から)	29
	(2) 2区住居跡9(南から)	29
P L. 8	(1) 3区4b層上面遺構(南から)	30
	(2) 3区土坑6(南から)	30
P L. 9	(1) 3区東半部地山上面遺構(南から)	31
	(2) 3区西半部地山上面遺構(南から)	31
P L. 10	3区4b層遺物出土状況(北から)	32

I はじめに

(1) 調査にいたる経緯

1992年、漂着物の研究者として著名な石井忠氏から、福岡市東区奈多における周知の埋蔵文化財包蔵地である奈多砂丘B遺跡において包含層が露出し、風波の侵食により消滅の危険性が高いという通報が、福岡県教育委員会を通じて、福岡市教育委員会埋蔵文化財課にもたらされた。これを受けて埋蔵文化財課ではただちに現地を踏査し、破壊の現状を確認した。その結果、緊急に保存措置を講じる必要があるという見解にいたった。これに伴い、1992年10月14日～11月28日にかけて発掘調査を行った。調査にあたっては文化庁の許可を得、国庫補助事業として行った。また公園管理者である建設省九州地方建設局海の中道公園管理事務所には国定公園内での発掘調査の許可をいただいた。また福岡県には玄海国定公園特別地域内における、自然公園法に基づく現状変更許可をいただいた。また福岡市雁の巣レクリエーションセンターには事務所設置等で多大なご協力をいただいた。記して感謝する次第である。

(2) 調査の体制

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 尾花 剛

調査総括 埋蔵文化財課 課長 折尾学 第2係長 塩屋勝利

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 中山昭則

調査担当 埋蔵文化財課第2係 宮井善朗

調査作業 熊本交伸 末永慶一 柳瀬伸 近藤澄江 村田敬子 川崎朋子

整理作業 小森佐和子 土斐崎つや子 堂岡晴美 太田順子 大石加代子 林由紀子 境靖紀

是田敦 田村佐和子

遺跡調査番号	9239		遺跡番号	N T B - 1	
調査地地番	福岡市東区大字奈多字小瀬戸1302-50				
開発面積	/	調査対象面積	1,000m ²	調査面積	70m ²
調査期間	1992年10月14日～11月28日	分布図番号	043-A-2		

II 周辺の歴史的環境

奈多砂丘は、福岡市と柏原郡の境界である三苦を基部として、志賀島に向かって延びる海の中道の中央部付近に位置し玄界灘に面している。この海の中道を中心に周辺の遺跡を概観しておこう。海の中道をめぐる歴史的環境は、遺跡が厚い砂層に覆われているために、いまだ明らかでない。

海の中道の歴史の始まりは旧石器時代にまで遡ることができる。奈多砂丘B遺跡の西、海の中道遺跡に西接するシオヤ鼻は岩盤を基盤とした丘陵で、頂部の風化土層から旧石器、縄文時代の遺物が出土している。また縄文時代の遺跡としては志賀島の志賀海神社遺跡があるが、その様相は未調査のため、明らかでない。

弥生時代にいたっても農耕に適さない海の中道には目立った遺跡は認められない。志賀島には若干の耕地が求められたようで、弥生時代遺跡が散見する。著名な遺跡では、銅劍鋒型が出土した勝馬遺跡などが挙げられる。偶然の発見によるものであるが、その後の再調査により、弥生時代中期の包含層が確認されている。これらの集落が、北部九州の中核である福岡平野、佐賀平野に多く分布する銅劍鋒型を有することは単なる農耕基盤の発展による社会の進歩のみとは考えられず、やはり、朝鮮半島、中国大陆へ向かう際の前線基地、水先案内の役割を考えるのが妥当であろう。弥生時代後期終わり頃には奈多砂丘B遺跡にもかなりの規模の集落の存在が予想されることが、今回の調査で明らかになった。これは弥生時代終末から、古墳時代初頭にかけて博多湾沿岸の砂丘地帯に集落、墓地遺跡が急増する状況と軌を一にしている。これらの集落は外来系土器を多数有し、交易に関わる集団の集落という理解もなされているが、奈多砂丘B遺跡では外来系土器の出土は、今回では見られなかった。

古墳時代にいたっても遺跡は多くは知られていない。ただ奈多砂丘B遺跡では須恵器片の出土を見ており、また縣の県立レクレーションセンター内でも須恵器が採集されている。また海の中道遺跡では4～5世紀代の土師器や製塩土器が出土している。一時にしきこの時代の村が成立したと考えられ、漁業集団の集落と考えられている。西戸崎には大岳古墳が築かれるがこのような集団の首長を葬ったのであろう。

歴史時代になると様相は一変する。海の中道遺跡が8世紀後半突如として人遺跡として出現する。公権力による強制的に作られたと考えられており、大宰府に食料を貢進した厨戸の可能性が考えられている。遺跡からは越州窯系青磁などを初め、他の農村には見られない特殊な遺物が多く出土している。また11世紀末で突然に姿を消すが、これも律令性の崩壊と軌を一にしている。

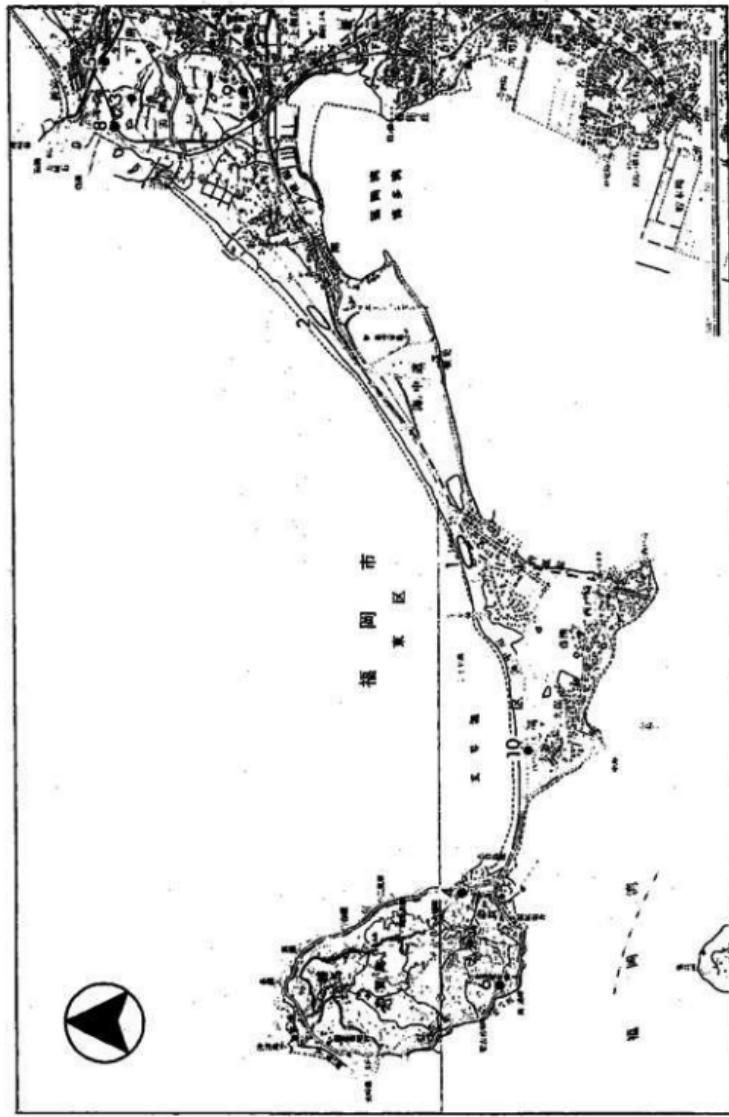


Fig. 1 奈多砂丘 B 調査地点位置図 (S=1:25000)

1. 海の中道遺跡 2. 奈多砂丘 B 遺跡 3. 下和白古墳 4. 志賀海神社遺跡 5. 下の村遺跡 6. 金印出土地 7. 中和白古墳 8. 水道遺跡
 9. 墓原遺跡群 10. 大岳古墳

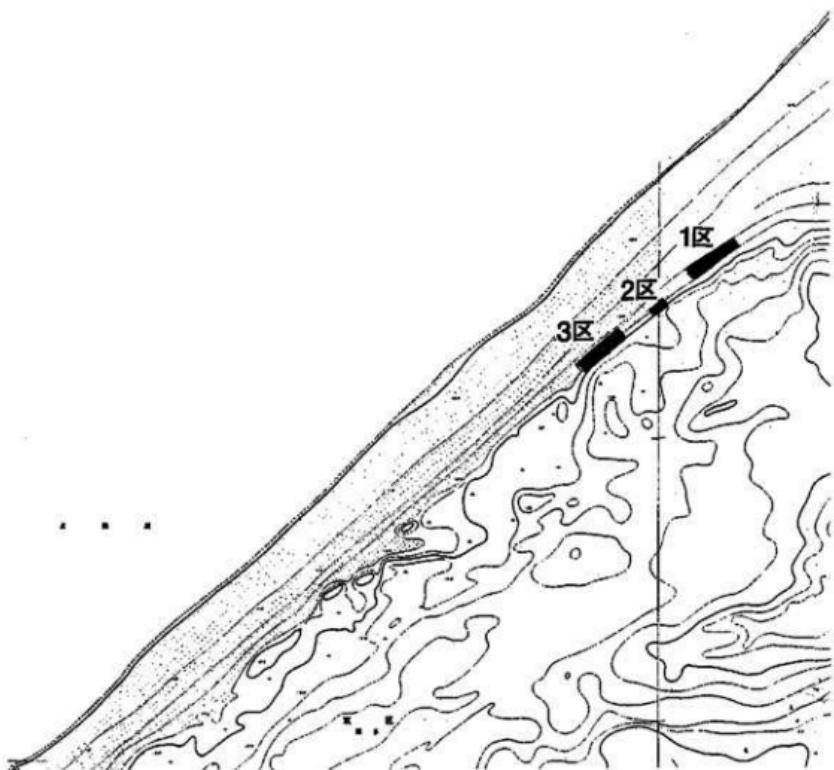
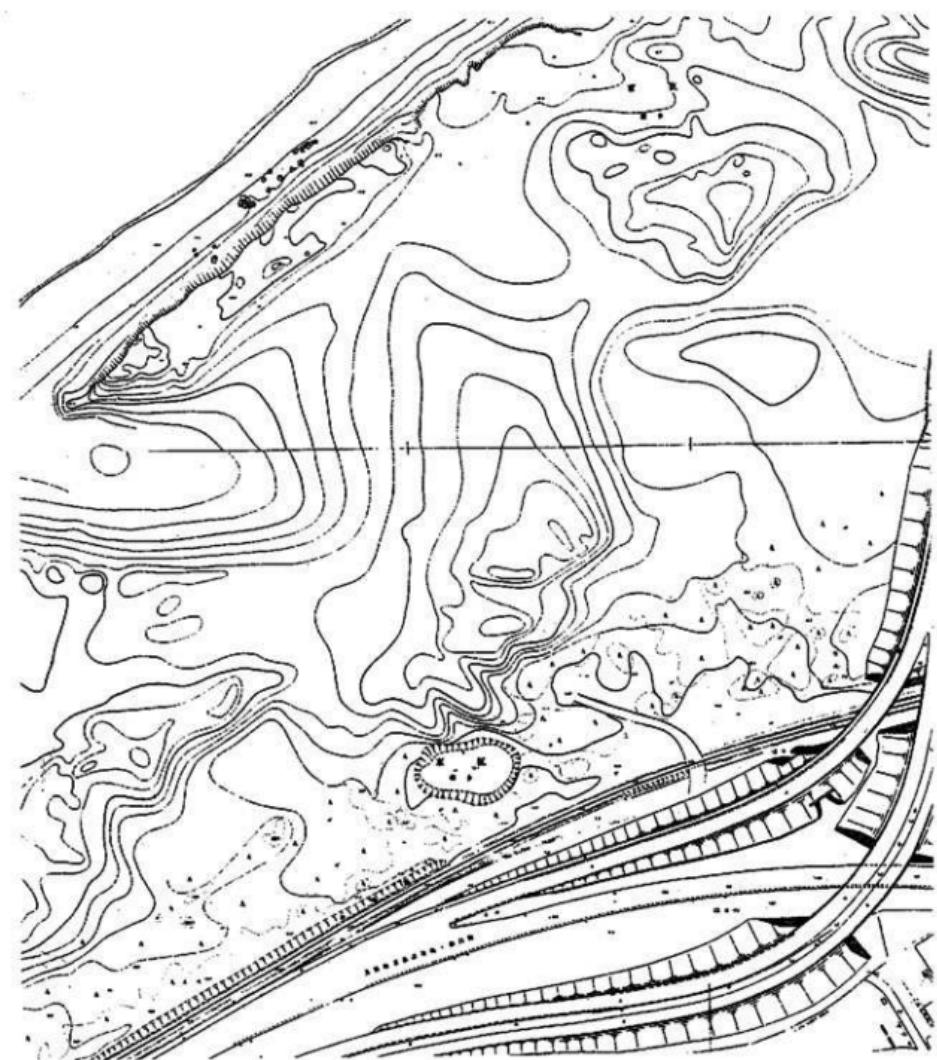


Fig. 2 調査区位置図 ($S=1:2000$)



III 調査の記録

(1) 概要

奈多砂丘B遺跡は汀線までの距離50m程を残すのみの波打ち際に立地する。しかも満潮時には包含層直下まで波が洗うような状況であった。この波による侵食も著しいが、更に包含層前面に多量の砂が堆積し、包含層の露頭面の延長をつかむことが困難であった。したがって、遺跡の範囲を正確につかみ、侵食被害の状況を精査するには、時間的、組織的な余裕が無かつた。そこで、今回調査は、奈多砂丘B遺跡における最初の調査ということもあり、小規模の調査区をいくつか設定し、層序、検出される遺構の種類、遺存状況、時期など、奈多砂丘B遺跡の概要をつかみ、今後の本格的な調査、保護措置に向けての、基本資料を収集することに、目的的第一を置いた。また調査区設定に当たっては、最も明瞭に包含層が露出し、遺物の包含も多く見られた露頭部を中心に選んだ。その理由は、遺構、遺物が集中しているという予想が付けられたためというはいうまでもないが、それに加えて、こうした露頭部は、自然の風波による侵食破壊のみではなく、人為的な採集行為による破壊も多く見られる箇所であったためである。事実、調査期間中にも海岸を散策する人々から、上器採集の経験談を多く聞かされたものである。なお奈多砂丘B遺跡は汀線から離れるほど包含層の上に堆積する砂が厚くなる傾向が観察され、小人数の人力による今回調査では、遺跡の南北方向（汀線にたいして直行方向）の広がりについての情報を得ることはできなかった。次回に期したいと思う。

以上のような調査方針のもと、調査期間との関係もあり、今回は3ヶ所の調査区を設定した。東側より、1区、2区、3区とした。それぞれの概要は以下の通りである。

1区 最も東側の調査区である。分層発掘を行い、各面で遺構の確認を行ったが、検出できなかった。遺物は相当量出土したが、少片のみであった。

2区 中央部の調査区である。調査面積は最も小さいが、住居跡2基を初め、遺構、遺物とも最も豊富に検出された。

3区 最も西側の調査区である。調査面積は最も広く設定したが、調査中に南側の崖が崩落し、下層の調査は北半分部分しかできなかった。土壌などを検出した。

なお出土遺物は総量で、コンテナ16箱ほどである。

(2) 層序

基本層序は1区、2区ではほぼ変化無い。以下に概要を期す。

1層 黄色砂。1区では最上層で、表土である。2区では1層の上に植生による腐食土を含む表土が乗る。

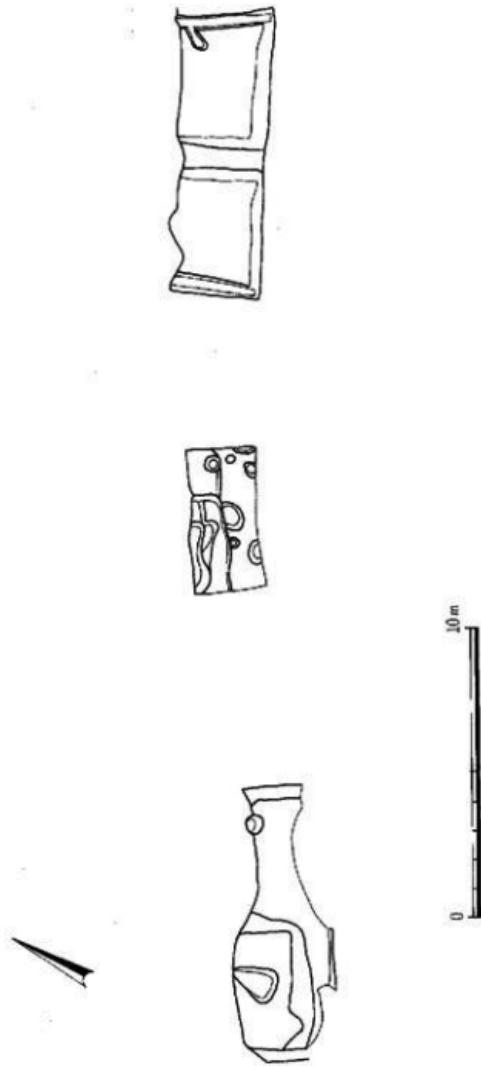


Fig. 3 調査区配置図 (S=1:200)

2層 黒褐色砂。1区では須恵器片が出土しており、古墳時代後期から古代の堆積と考えられる。

3層 黄褐色砂。黄褐色の薄い砂層で、2層と、4層を区切る基準層になる。2区では上面から遺構を検出した。

4層 黒褐色砂層であるが、2層にわかれれる。4a層は、4b層より若干黒みが強い。1区、2区とも、弥生時代終末期の遺物を多く包含する。2区では、4a層上面で遺構2（土錐集中遺構）、4b層上面で住居跡などの遺構を検出した。

地山 黄色砂

なお3区は高さ3mほどの砂の堆積による崖面の前面の調査区であり、表上下にすぐ黒褐色の包含層を検出した。出土遺物、また露頭面の状況から見て、4a層相当面と思われる。この包含層は観察の結果崖下に伸びていくと考えられ、奈多砂丘B遺跡は部分的にはかなり厚い堆積砂の下に埋もれていると考えられる。

(3) 検出遺構

1区の調査

1区は最も東側に設定した調査区である。調査面積は31m²である。層序は先述したように1～4層の水平堆積である。1層が表土となるが、東側では1層が削平され、直接2層が露出している。各面で遺構検出を行ったが、明確な遺構は検出されなかった。ただ、3層中に黑色砂のブロック、地山上面でピット上の落ちこみを検出した。黑色砂のブロックについては、2区の3層上面で、木炭を多量に含む上層が検出されており、このような遺構と関連するかも知れない。2層からは須恵器片、4層からは弥生時代後期終末期の土器片が出土している。

2区の調査

2区は中央部に設定した調査区である。表土には雑草がはえ、この植生により腐食した表土層が、1層の上面に乗る。調査面積は19m²である。遺構、遺物が最も多く検出された。

土壌1

3層黄褐色砂層上面で検出した。径1mほどの円形を呈する。深さは30cmほどである。覆土中に多量の木炭を含む。3層は1区で須恵器を包含する2層の下位であるから、古墳時代後期～古代を含めて、該期以前と考えられる。ここで注意されるのは、西に4kmほどはなれた海の中道遺跡との比較である。海の中道遺跡では、製塩などに用いられたとされる炉跡が多数検出されている。今回調査の上層1とは形態も規模もことなるものであるが、周囲の調査を行えば、海の中道遺跡と類似した古代の遺構も検出される可能性は高いと考えられる。

3層上面ではこの他にピット、溝状遺構などを検出した。溝状遺構は方形または円形にめぐるが、極めて浅く、遺構として捉えうるものかどうか疑問である。無論出土遺物も無く、遺構

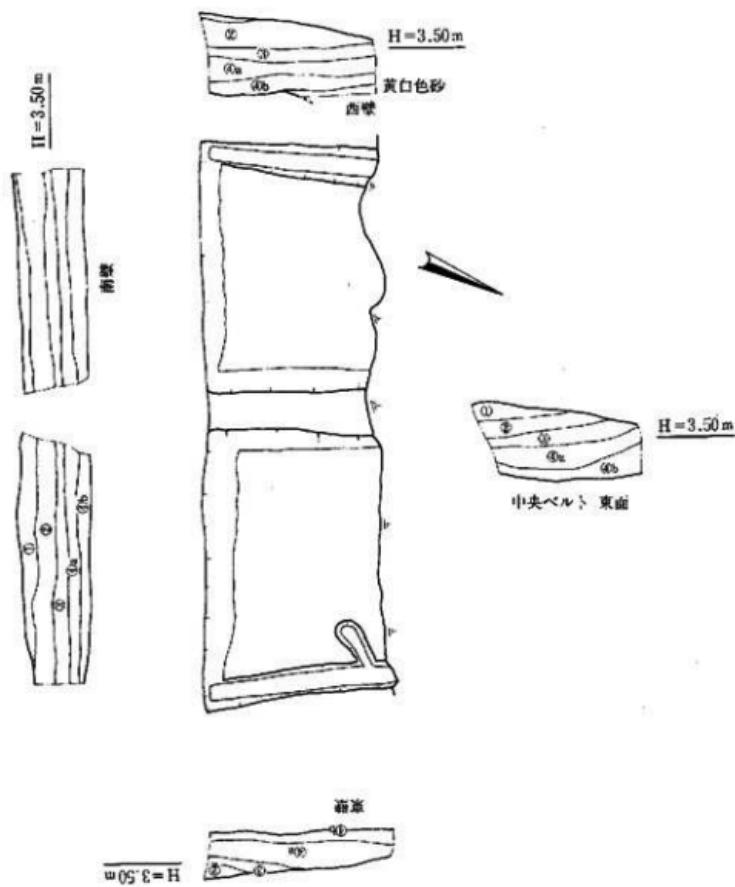


Fig. 4 1区 実測図 ($S = 1:100$)

番号は付していない。

遺構2（土鍤集中遺構）

2区4層黒褐色砂層上面で検出した。土鍤45個が、ほぼ $1.2m \times 0.8m$ の範囲に集中して出土した。掘方などは見られない。出土状況を観察すると、同一方向を向く3列ほどの列状をなすようにも見える。そうであれば、紐が通された状態で廃棄された可能性を考えることができよう。

住居跡3

4b層上面で検出した。北側と、西側を侵食により削平されている。ほぼ方形もしくは長方形に復元されよう。床面には段状部を有し、かなり凹凸はあるもののベッド状遺構を持っていた可能性が高い。北側で現長3.3mを測る。覆土中には多量の土器が投棄されていた。弥生時代終末期に属する。床面では、ピットなどは検出できず、主柱穴の特定はできなかった。4b層上面では、この住居跡3のほかピットなどを検出した。

住居跡9

地山である黄色砂層上面で検出した。北側と、西側を侵食により欠く。ほぼ方形もしくは長方形に復元できよう。床面はほぼ平坦で、ベッド状遺構などは見られない。残存する規模は、北辺長3m、東辺長0.8mほどを測る。遺物の項でも述べるが、住居跡9から出土した遺物と、住居跡3から出土した遺物は、時期的にほとんど差がないものである。また、検出した位置もほとんど重複していると言ってよい状況である。これらのことから調査時から住居跡3と住居跡9は同一遺構ではないかとの疑問を持っていた。しかし、検出位置が、住居跡9の方がわずかに南へずれること、それに伴い主軸方向も異なることから時期差はわずかであるが別遺構としてとらえてよいと考える。したがって4a層の堆積時間は極めて短いものになるが、実際の掘り込み面は、住居跡9も住居跡3と同じ4a層であったが、4b層検出時まで検出しえなかつた可能性は考えておかねばならない。

3区の調査

3区は最も西側に設定した調査区である。調査面積は20m²である。2区の西側付近から砂丘は包含層との比高差3mほどの高まりを持つようになり、海に面した側が侵食により、急な崖面をなしている。3区はこの崖面の前面海側に設定した。崖面から落ちた砂層を取り除くと、その直下から包含層が表れた。これは1、2区の4層に相当する層である。4層を振り下げ、ほぼ4b層に相当する層の上面で、遺構を確認した。また地山上でも遺構を確認した。調査中に崖面の崩落が起こり、南側半分が埋没してしまったので、4b層の振り下げ、及び地山面での遺構確認は北半部分しか行えなかった。

土壤6

4b層上面で検出した。ほぼ方形もしくは長方形を呈するが、床面が平坦でなく、住居跡で

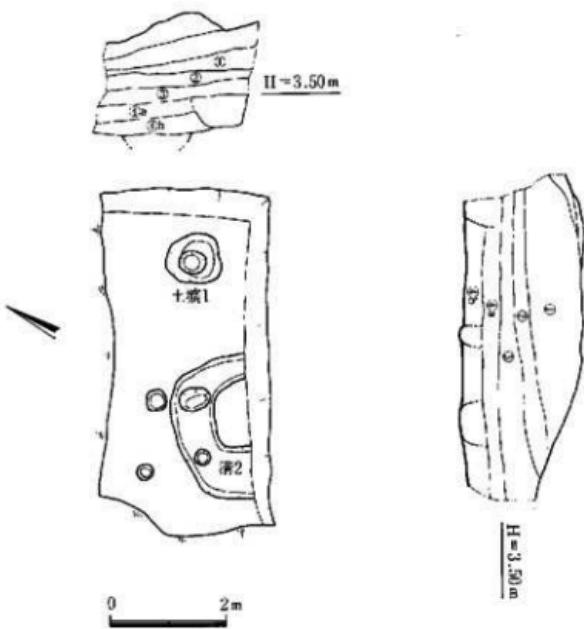


Fig. 5 2区 实测图 ($S = 1:100$)

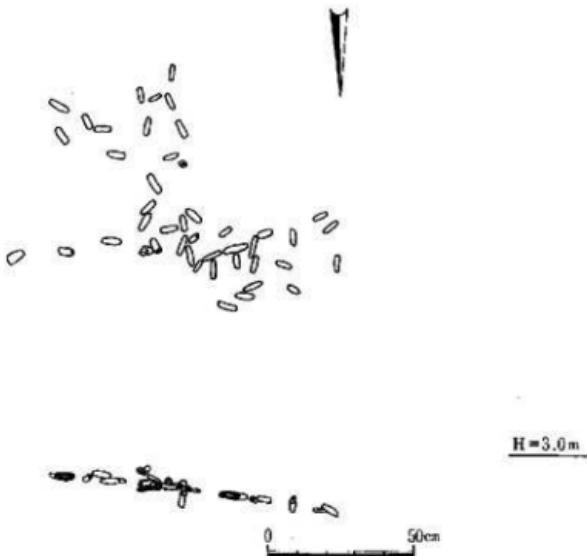


Fig. 6 2区 上鍤集中遺構実測図 ($S = 1:20$)

ないと考えられる。地山上でもほほ同じ位置に落ちこみが見られ、これは同一遺構の可能性が高い。3区4b層上面では、この土壤6の他にピットを検出した。

また地山である黄色砂層上では先述した西側の落ちこみのほか、楕円形を呈する土坑1基、ピットなどが検出された。

この4層に相当する包含層は、確認するための観察をする前に崖面の崩落が起こり、今一つ疑問も無いではないが、崖面内部にも延びていっており、包含層、及び遺構が南側へ広がっている可能性は高い。次回の調査に当たっては、この2~3mに及ぶ厚い砂層を除去するだけの体制と、装備を必要とする。

(4) 出土遺物

遺構2(土鍤集中遺構)出土遺物 (Fig. 8)

土鍤集中遺構から出土した土鍤の一部をFig. 8に図示した。極めて一括性の高い遺物にも関わらず形態にはバリエーションが大きい。量的には長く、円筒形に近く、端部で若干細くなる形態のもの(3、7、19など)が多いが、円筒形で短いもの(2、17など)、短い紡錘形を呈するもの(9、21)等もある。出土位置が、紐通しされた状態をある程度反映しているとすると、形態による使川箇所の違いの様なものは見られないようである。

住居跡3出土遺物 (Fig. 9、Fig. 10-1, 2)

1は突帯を持つ大形壺の肩部付近であろう。突帯には板小口状の工具で、刻目を施す。内外

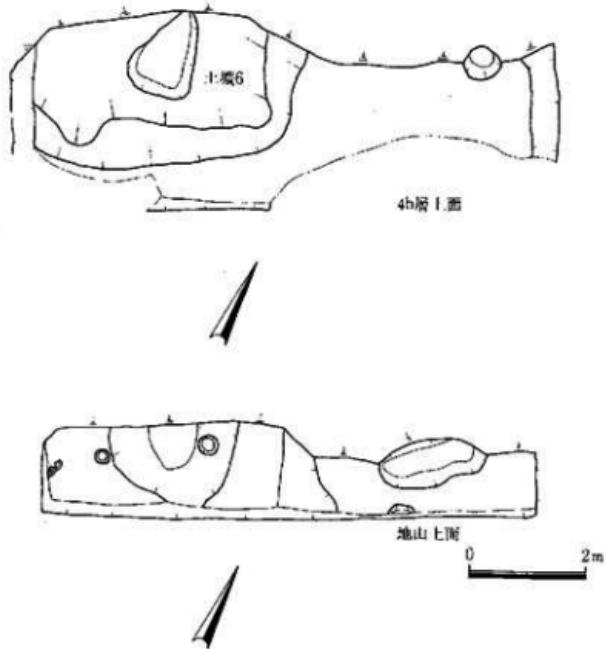


Fig. 7 3 区 实测图 ($S = 1:100$)

面ともハケメ調整される。2は胴部突帯の部分であろう。板小口による刻目を施す。突帯の断面は台形である。3は台付鉢の胴部である。4のような台が付くものであろう。外反しながら広がるII縁部を持つ。肩がわずかに張る。4は台付土器の脚台部である。裾部で大きく広がる。脚端は平坦面をなす。外面はハケメを施す。5も大形壺の肩部である。口縁部付け根に突帯を巡らす。突帯には板小口による刻目を施す。6は壺底部である。球形に近い胴部を持つが、在地土器と考えられる。7も大形壺の肩部である。肩がほとんど張らない。口縁部付け根の突帯は幅広で低く、ヘラ状工具による格子目の刻目を持つ。8は壺底部で、丸底である。内外面にハケメを施す。9も壺の頸部付け根の突帯部であろう。板小口による格子刻目を施す。10は大壺もしくは大形壺の口縁部であろう。端部は平坦面をなし、板小口による刻目を施す。11は高坏脚部である。ハケメの後ヘラナデ調整される。Fig. 10-1はあまり見ない器形であるが、壺もしくは器台の一種ではないかと考えられる。内外面ハケメ調整され、頸部内面に指痕が見られる。2は鉢である。短く屈曲する口縁部を持つ。

住居跡9出土遺物 (Fig. 10-2~6)

3は小形壺、もしくは鉢の底部である。底部は平底である。このようなところに、住居跡3との時期差を求めることができるのかも知れない。4は高坏脚柱部である。外面はヘラナデを施す。5も小形の鉢である。短く屈曲して広がる口縁を持つ。6は大形壺の胴部である。突帯面には横方向のハケメを施す。

土壤6出土遺物 (Fig. 10-7~11)

7は壺口縁部である。II縁端は平坦面をなす。口縁付け根に突帯を巡らし、粗い刻目を施す。8は壺の肩部である。突帯には板小口による刻目を施す。9も大形壺の胴部であろう。口縁部付け根に低い突帯を巡らし、板小口による刻目を施す。10は高坏部である。坏部中位で弱く屈曲する。11は高坏脚部である。内外面ともハケメを施す。

3区4b層出土遺物 (Fig. 10-11, 12)

Fig. 10-11は壺口縁部である。短頸壺の口縁であろう。II縁端は平坦面をなす。内外面ともハケメを施す。Fig. 12-1は平底の壺底部である。3も同様な壺底部であるが、やや円レンズ気味になる。2は大形の壺底部である。4は壺肩部で、II縁部付け根に突帯を巡らし、板小口による刻目を施す。5は壺頸部であろう。付け根に崩れた三角突帯を巡らす。6は壺頸部であるが、外面に備文による文様を持つ。7の外面にも同様な備文を持つ。8はやや薄手の土器で、小片ではあるが外面に重弧文を施す。該期の北部九州の土器には類例が求められない。中部九州の免田式系の壺形土器片の可能性がある。

以上の4b層土器群は弥生時代後期後半~終末に位置付けられ、2区の住居跡9と住居跡3の出土土器の違いも勘案すると、4層は4b層が弥生時代後期後半~終末、4a層が後期終末という若干の堆積時期の差がある可能性がある。しかし器形を明らかにしうる土器が少なく、

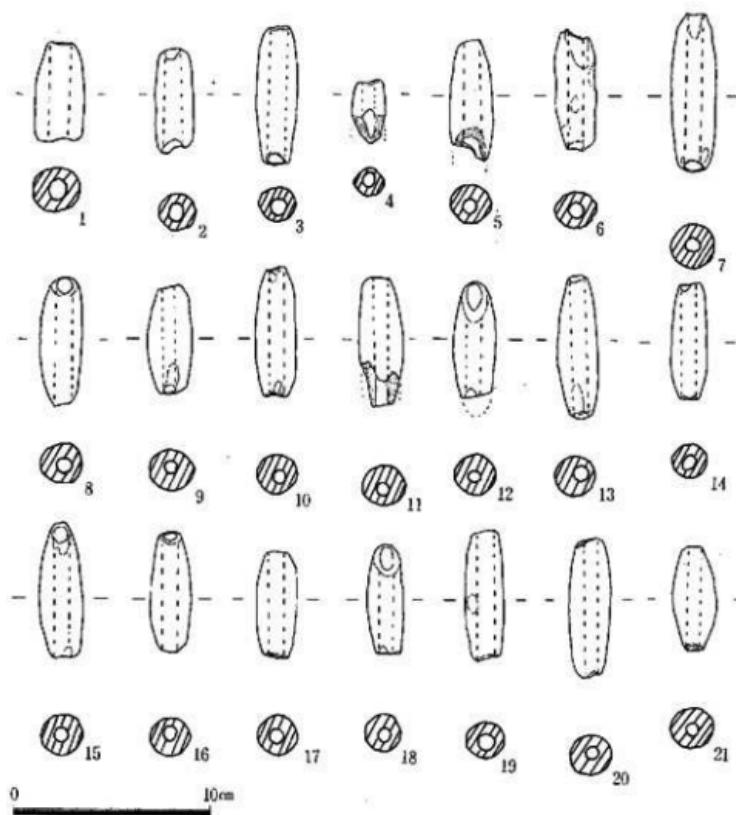


Fig. 8 土錐実測図 ($S = 1:3$)

調査面積も少ないので、次回調査の目安程度に考えておく方が妥当であろう。

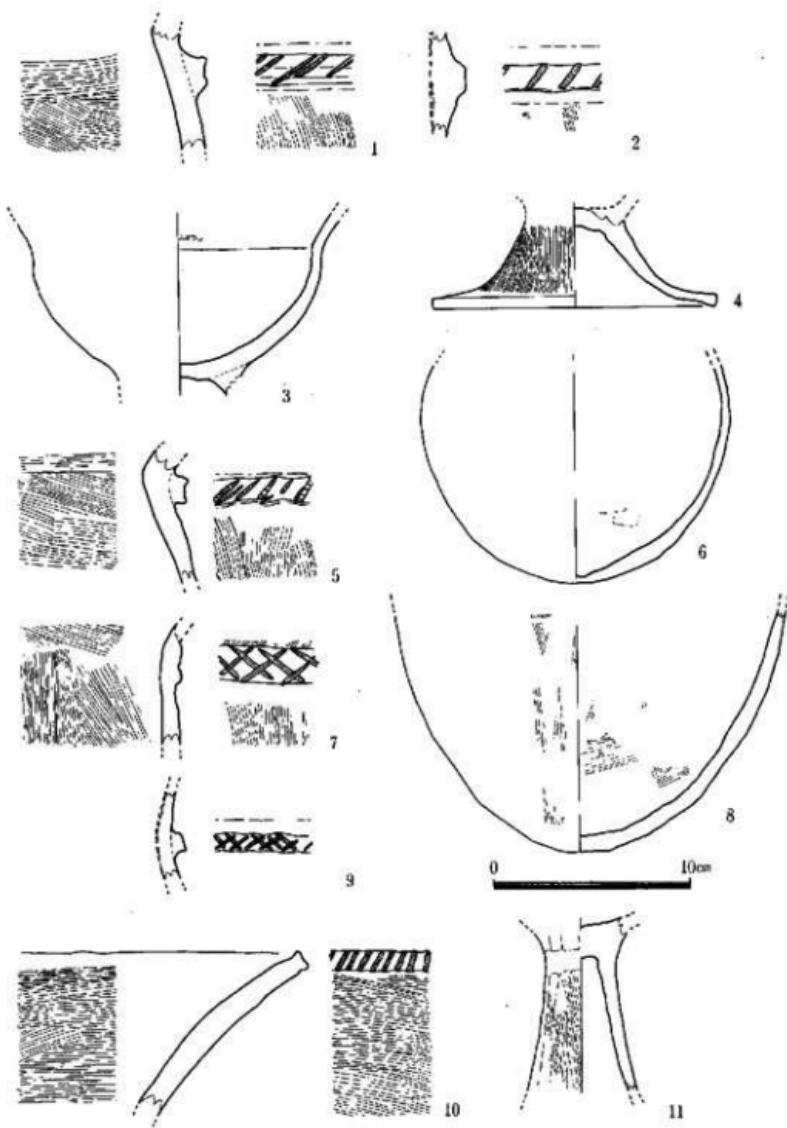


Fig. 9 住居跡3出土遺物実測図 ($S=1:3$)

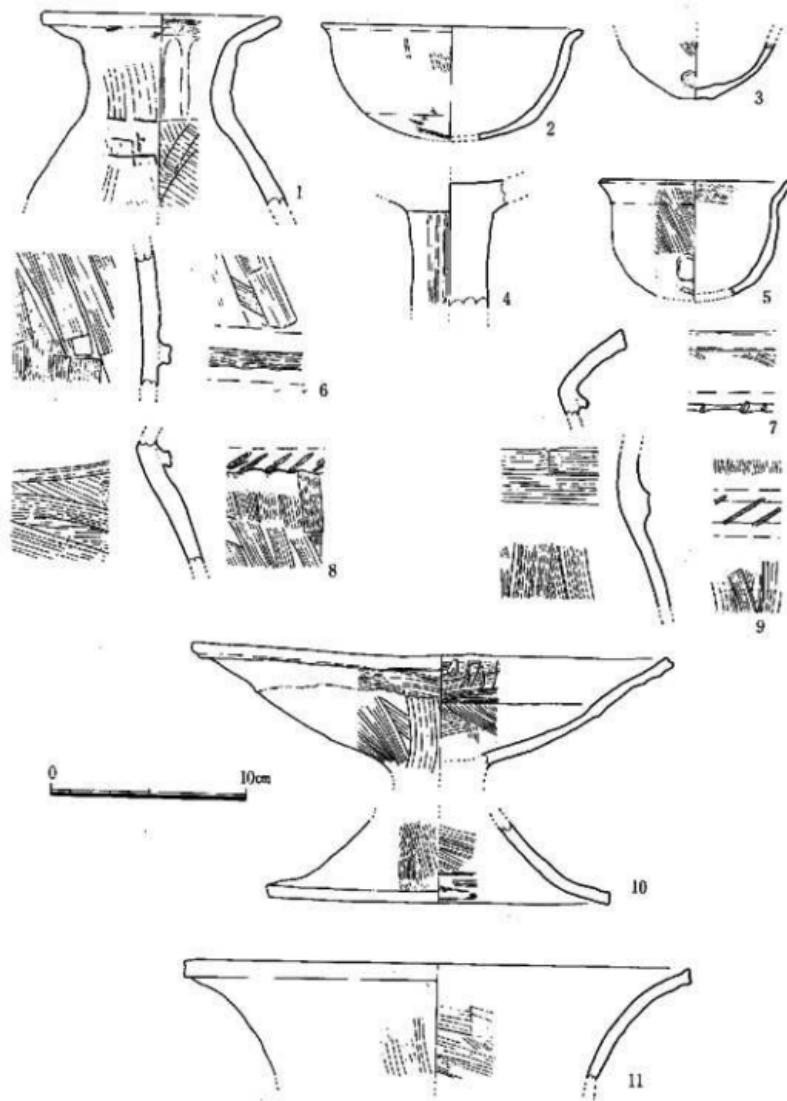


Fig. 10 住居跡3 住居跡9 遺構6 3区4 b層出土遺物実測図 ($S=1:3$)

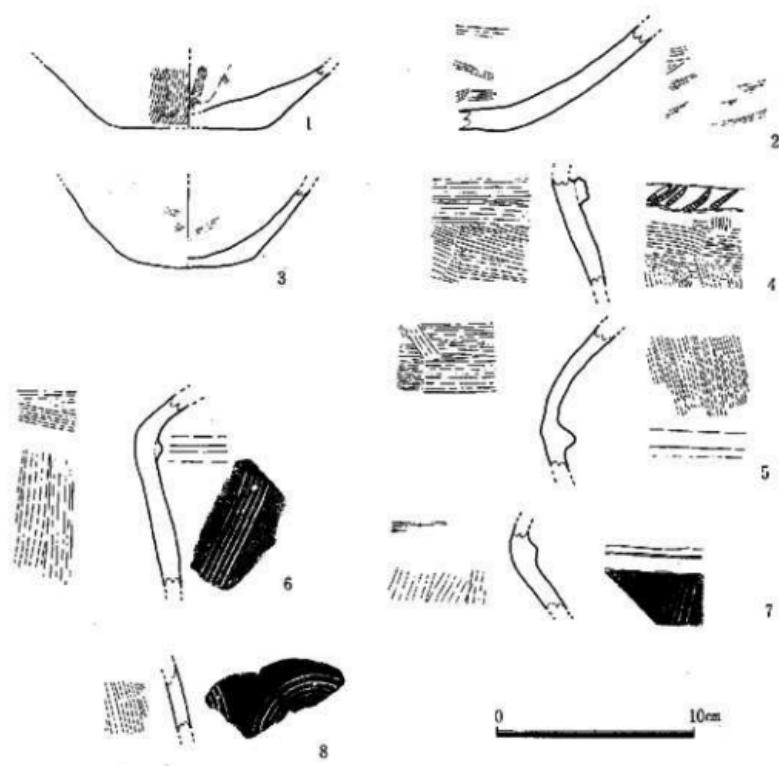


Fig. 11 3区4b層出土遺物実測図 ($S=1:3$)

P L A T E S

(1)



(2)



(1)調査前の状況 (2)1区南壁土層（北から）

(1)



(2)



(1) 1 区南壁土層（北から） (2) 2 区土層（西から）

(1)



(2)



(1) 2区3層上面透構検出状況(東から)
(2) 2区3層上面透構完層状況(東から)

(1)



(2)



(1) 2区造構 2土錘出土状況（北から） (2) 2区造構 2土錘出土状況（北から）

(1)

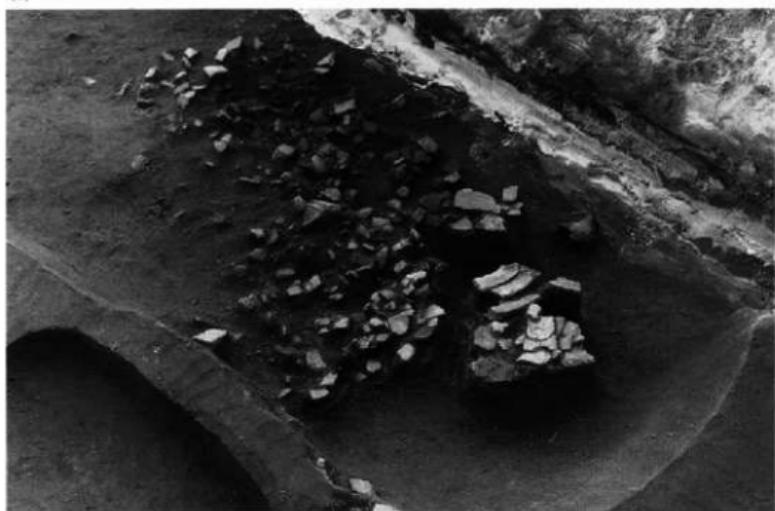


(2)



(1) 2区4号上面造構(東から) (2) 2区住居跡3(南から)

(1)



(2)



(1) 2区住居跡3遺物出土状況（南から） (2) 2区住居跡3完掘状況（南から）

(1)



(2)

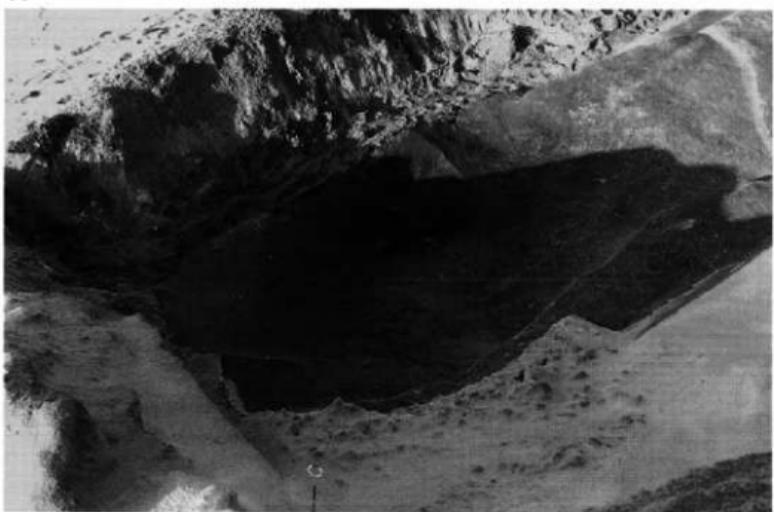


(1) 2区4b層上面造構（東から） (2) 2区住居跡9（南から）

(1)



(2)



(1) 3区4b層上面造構（南から） (2) 3区土壤6（南から）

(1)



(2)



(1)3区東半部地山上面造構（南から） (2)3区西半部地山上面造構（南から）



3区4 b層遺物出土状況（北から）

奈多砂丘B遺跡1

福岡市埋蔵文化財調査報告書第360集

1994年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
(092)711-4667

印刷 株式会社ミックスコーポレーション
福岡市博多区博多駅南六丁目6-1
(092)431-4061

